



Title	随想 : 山に寄せて
Author(s)	辻野, 直三郎
Citation	makoto. 1973, 3, p. 4-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86272
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



山に寄せて

辻野直三郎



にも秀麗をもって名高いのは、駿河、甲斐二国にまたがり、静岡、山梨の県境にそびえる円錐火山、富士山（標高三・七七六m）であることは、何びとにも異存のないところであろう。山々は、高さや形状による分類として、三・〇〇〇m以上の標高をもつて急にそびえる高連山地、一・〇〇〇mから二・〇〇〇m程度の中連山地、五・〇〇mぐらいの低い山丘陵地に分けられ、あるいは山地は、平面形にしたがって山脈山形にも区分される。日本アルプスは通俗的な地名であつて山系とみて、その中に木曾山脈その他を含む。また飛騨山脈の中には、立山連峰や常念連峰が含まれている。アルピニストにとつて、最大の関心事である山岳の気象観測について述べることにしたい。富士山の頂上に、気象観測所を建設する目的で、先覚者野中到氏が明治八年（一八九五年）に登頂したのが最初で、気象観測が実現するまでには、多くの困

難と、尊い犠牲（ぎせい）が払われたことを忘れてはならない。そして、一九六五年初めから、富士山頂の気象レーダーが開始された。これに用いられたパラボラ・アンテナは、直径五m、定格出力一・五〇〇kWで、最大探知距離は八〇〇km（高度一万m）に達しているとするされている。

山が人種の分布や文化の移動に、大きな影響を及ぼす例は多い。井上靖先生発表の西域物語にある、ヒマラヤからバミールを経て、天山につづく高山地、いわゆる「シルク・ロード」による西洋文化と東洋文化との接触交流などは、最も顕著なものである。

さて、わが国における山を背景とした山岳崇拜、宗教、信仰登山は、世界的にも有名とされているが（？）、山そのものが聖地として人格化されたもの、あるいは、山の量感、威厳、秀麗、雲霧を隔てて接近、または登山の困難、危険等による崇敬、

山が神霊の住居と見られるなど、いろいろの理由があげられる。その山岳宗教の最たる（？）ものとして、近畿には、大和の大峰山（西のぞき、東のぞき）行事で庶民に恐れられている）、奥州には出羽三山（羽黒山、月山、湯殿山）があげられる（即身成仏祭祀で名あり）が、いずれも、往時より山伏の修験道としての霊場として、その名をなしている。

山により王朝にゆかりの地として、近畿には大和三山がある。これは、畝傍山（うねび）一九九m、耳成山（みみなし）一四〇m、天香久山（あまのかぐやま）一四八mで、奈良盆地の南部に、三角の頂点をなし、対立して処在する歴史的名山である。この三山の間の低地は、藤原京のあった所で、王朝を守る位置にあった。神武天皇を奉祭する橿原の宮の地であることは、今更ことあげするまでもない。

吉野山は、南北朝時代（一三三六―一三九二年）における南朝の所在地として有名であり、桜の名所でもある。

「花書よりも軍書に悲し吉野山」と歌われているように、王朝の系統をめぐる悲しい一面の歴史の地でもある。なお、警世的存在を誇示する活火山としては、阿蘇山、浅間山は忘れることのできない名山といえよう。さて、山岳による恩恵として、降雨量によるダム建設で、渇水期における灌漑用水の供給源ともなり、水力発電により文化に貢献することも、非常に大なるものがある。終りに、山は愛すべし尊ぶべし、山は恐るべし軽んずべからず、山を富ますべし、山による自然の美を、環境の美しさを、私たち日本人の、身心のやすらぎの地として守りたいものである。（妄言多謝）

府政だより

大阪府衛生部では次の行事を行います。

○日本脳炎予防特別対策

期間 四月～九月

蚊の駆除指導

予防接種：七月末まで

○夏季食品一斉取締り

期間 六月～八月

○全国愛の血液助け合い運動

期間 七月

山とは、辞書をひもとくまでもなく、周辺の土地より著しく高く隆起した地塊（ちかい）である。日本領土の面積は、三七七・三八九平方kmであつて、そのうち平野部は九二・九一二平方km、山岳（山地）部は二八四・四七七平方kmで、山岳部の日本国土に対するパーセンテージは、実に七五・三八%にも達し（建設省日本国土地理院調査昭和四十七年十月現在）、いかにわが国土が、山岳によって形成されているかがわかる。その多くの山の中で、世界的